

夏季福音特別集会 第4回集会

「担いの愛」——キリスト者の実存（コリント前書第13章）

2003年8月17日（御殿場YMCA東山荘）

キリストへの感謝と讃美 主役は主さま 自分を実験台に 十字架で罪を赦す 現の中の現 聖書は私の身分証明書 『福音の心臓』 十字架の下で握手 四つの非ず 愛（＝私）は寛容にして 慈悲あり 十字架の凄さ キリストの無 自分を問題にしない 確かな希望 最も大いなる愛 伝道者が私の天職 愛には懼れなし

●キリストへの感謝と讃美

皆さん、お早うございます。あつというまにというのが私の実感ですけれども、第三日目を迎えて、これが最後の集会ということになりました。昨日の早天祈祷会は、私は半分遅れて、皆さんが心をあわせて力強く祈っておられるところに忍びこんでまいりまして、後半をご一緒いたしました。今朝は、私は幸いにも5時半頃に目が自然に覚めたものから、六時半少し前にこちらへ参りました。本当に今朝はまた、非常に落ち着いた素晴らしい祈祷会になりました。これはもちろんプログラムになかったものが自然発生的に行われた早天祈祷会だったけれども、皆さまの祈りを私は聞いていて、全く力みがないんですよ。内から溢れ出てくるんですね。誰が祈ったら次は誰が祈らねばならないとか、人間の集まりだったらついそういうことを考えるけれども、昨日の晩の祈祷会そして今朝の早天祈祷会は、本当に自然に内からあふれる讃美が、ただキリストへの感謝と讃美が溢れておりました。非常にありがたい満ち足りた思いで朝を過ごすことができました。

本来ならばこれは集会が終わりましてご挨拶で申し上げることですけれども、私はひよつとしたら感動してしまって、何も言うことがなくなるかもわからないので、あらかじめここで申し上げておきたい。この三日間の集会のために本当に早くから準備してくださったM兄弟、それを支えてくださったご家族、それから裾野の皆さん、本当に私は心から感謝したいと思います。

どんな行事も、オリンピックををはじめ、あるいは我々でいうなら、マラソン大会とか——あれは万人集まったりいろいろしますけれども——規模の大小にかかわらず、どんな催し物にも必ず裏方さんとして一生懸命にやってくくださる方がいる。スポットライトが当たるのは、こういう華やかなと申しますか、集会なんですけれども、その陰に——刺繍でいうならば、裏の面ですね、表は綺麗な刺繍なんですけれども、裏はいろいろ苦労の跡がにじみでています——そういう裏方として一生懸命に労してくくださる方々のご愛労があつて、この集会が成り立っています。

今回の讃美歌は、私はつくづく思うんですが、第一回から今にいたるまでよく選曲でき



ていて、本当にその集會にピッタリの讃美歌がずっと流れてきていることを思いましてね——選んだのは私ですよ、けれども——

「汝、われを選びしにあらず、われ汝を選びたり」

という、その主さまの御声が背後にあるような気がいたしております。本当にピッタリなんですよ、一つずつ。そして、もうひとつうれしいことは、この召団讃美歌です。これは小池先生が本当に生命をそそいでお書きになった讃美歌です。「使徒らの昔を」（B2「使徒らの昔を慕いて我は みふみ 聖書に読み入り祈りてあれば み霊の我が主はわが身を抱き 十字架に耐え得る力を賜う」作詞1979/12/9）なんていうのはかなり早い時期につくられました。1979年ですね。その一つ一つが、ここで歌っていますと、何か小池先生がここに一緒に居て、ニコニコ微笑みながら一緒に歌っておられるような気がしてならない。今まであまりそういうことを思わないで、召団讃美歌を歌ってきた。でも、何か今回の特別集會で歌うごとに、なんだか先生がそこにいらっしやるようで、しかも一つ一つの言葉に力がある。生命があるんです。これはだてに歌うものではない。本当に一つ一つ——「わが言は靈なり生命なり」という——そういう言葉で満ち満ちているのがこの召団讃美歌で、今回選んで歌っていただいたものです。他にもいろいろあると思いますけれども、特に今回、歌いながら実感いたしました。

一般讃美歌も美しくて非常に私たちのハートにしみこんできたりしますけれども、力強さという点では、この小池讃美歌に勝るものはないような気がいたします。一般讃美歌でも、あのルターの「神はわがやぐら」（167）は力強いし、あるいは121番「まぶねのなかに」の歌だとか、そういう本当に光っているものもありますけれども、総じておとなしい。一般讃美歌はおとなしくて、いかにもミッシェンスクールに相応しいような、女学院であったり美しい宣教師であったり、美しいステンドグラスの中で歌うような、そういう雰囲気はどうしてもある。ところが、我々は野性の集団なんです。本当にこれは野性の集団、雑草の集団であって、この雑草の集団にはこの小池讃美歌が非常に相応しいふさわということを実感いたします。我々はその意味では、挑戦者です。完成されたステンドグラスの中にいるくらびやかな、何か華やかな衣装で讃美歌を歌っているというような、そういう貴婦人の集まりではなくて、私たちは野性の集団という気がしてなりません。ですから、こういうところが実に相応しいですね。

● 主役は主さま

小池先生がよくおっしゃった。我々の生活の隅々すみにおいて、一言葉の祈り、聖書の朗読、一つ一つが全身全霊でなされる。全的というのはそういうことだよと。分裂していたらダメ。もし分裂しているなら、分裂している自分をそのままキリスト・イエスにぶつけて、とにかく——ドイツ語でいうと「ガンツハイト」（Ganzheit全体、全部）というんですけれども——



全部を投げ出す。よく博打うちの話をしましたね、あまり品がよくないけれども（笑）。博打うちというのは全財産を賭けて、それでミスッたらもう何も無いという、これが江戸っ子の気合だと言って、先生は江戸っ子であることを非常に誇りにしておられました。ベラメン調のね。そういう意気。「人生、意気に感ず」というか、非常にそういった俠客氣質と申しましょうか、武士氣質と申しましょうか、そういう、あとに何も残さない、全部をぶつけていく気合というものをもの凄く先生は大事になさいました。

私たちの集会というものは、こうやって夏は東山荘に集まる。日頃は、新宿集会の方々、転々と宿を代えておられるんです、気の毒にも。つまり、定住の場所がいただけでない。毎月、毎月、二か月くらい前でしようか、先着順で申込みをされて、そしてそれに当たれば、そこを集会所にするという正に幕屋精神を地でいかれている。

京都は、私の自宅がずっと集会所になっています。一時、教育文化センターを借りてやったことありますけれども。我が自宅のありがたみは時間制限がないということです。スピーカで、「あと15分で終わりです」なんていうアナウンスがかかってこないのです、安心して集会に没頭できる。それから、私の所では、放送設備を、マイクの設備を電気屋さんにたのみまして、二階でやっている集会を一階にもそのまま伝わるようにして、そこで子どもたち、裕美なんかが翔ちゃんのお世話をしながら、一緒に集会を受けとることができるという、そういうこともいたしました。

それぞれの各召団において、いろいろ工夫をなさって、今は規模は小さくても、自分たちの祈りは日本中を駆けめぐっている。世界に発信されているという、そういう思いでなされていると思います。京都も、日頃少ないときは十人に満たない。それでも、あちこちに散らばっている兄弟姉妹たちが、クリスマスだ復活節だといって集まりますと、かなりの人数になります。私はそうやって各地に散らばっている兄弟姉妹たちがそれぞれの所でじつとしていられないという、行くところ行くところで花を咲かせ、小さな家庭集会でもいい、何かそういう形で、我々が主さまからいただいた実を分かちあたる、そのことをやっていたきたいという願いを持っています。立派な集会である必要はない。

「二三人わが名によりて集うところに我も居るなり」

と。自分が語るにまだ熟していないと思えば、自分が感動したテープをお使いになって、そして、全部でなくていい、そのうちのさわりの部分の30分だけでも聞いて、それから祈るといい。要するに、祈りへの呼び水ですから、前座ですから、私たちが話していますのは、告白しながら、それが皆さまの魂にいつしかしみ込んでいって、いつしか同化されて、同質になって、一つの祈りが燃え上がっていく。これが私は理想的な集会だと思っています。

今年のこの御殿場集会はそういう姿になりました。二泊三日の集会は去年、復活したんです。今年は、質的に一歩更に深められた、高められた、そういう思いであります。では、いかにも私はよく準備したかという、そうではない。本当に時間がとれなくて、前日し



か時間がなかった。プログラムを作ろうと思ったら、大体、お話の順序が決まらないとプログラムができないんですけれども、それが一日でできあがりまして、それで、馳せ参じた。ですから、いわゆる参考書とか、いわゆる立派な先生方のご著書を引用して皆さんにご披露するという、そういう食材は何もない。食材はこの聖書、しかも新約聖書に集中いたしました。今朝の祈祷会では預言書からいただきました。けれども、私の思いをはるかに超えて、皆さんの思いをはるかに超えて、主さまが存分にここで働いてくださったと思います。

これは秘訣です。自分たちで人間的に十分準備したから、だから、いい集会になるか。気持ちは尊いですよ、けれども、主役は主さまなんです。

「お前は僕だ、お前は仕女だ、玄関番だ。お前は、兄弟姉妹方がどうやって心を開き、本当に飾りなく、あるがままで主さまに魂の扉を全開するか、その導きをしろ。」

そしたら、語るのには私である。働いて業を行うのは私である」と。主さまは一人ひとりに本当に御業をなさる。そういうことを、今回の集会では私はまざまざと実感させていただきました。特に初めておいでになった方々、また、途中からの参加の方もいらつしやいます、そうした方々にも等しき恵みを、というのが私の願いです。

●自分を実験台に

私は京都でもそうです。新しい方がおみえになりますと、その方に焦点を合わせてお話しいたします。古い方はさぞ退屈かという、決してそうではありません。それを通して、今まで何年も集っておられた方がまた新しく目を開かれる、ということをあど感想をもられます。と同時に、新しい方がおみえになったときに、私が語られること、それを古い方は参考になさって、自分が新しい方に語るときにどういうふうに語れば、その人の心に届くのか、どうやったら心を開いていただけるのか、その参考にしていただきたいんですね。

福音は同じ福音です。けれども、その福音がどうやってその方に届くのか、どうやったら、その方が心を開くのか。どうやってそこにキリストの高みにまで引き上げられるのか。これにはやはり、天の智慧というものが必要なんです。これは私は最初のころはわかりませんでした。でも、小池先生にくつついて何十年もやり、そして、先生亡きあとも、また私はこういう立場に置かれ、そして日頃は京都でいつも日曜の集会をやっている。伝道講演会もやる。そんな実践的なトレーニングを通して次第次第に私の身についてきたことでありまして、見よう見まねでやって、ダメなんです。ダメだけれども、何かそこにきつと皆さまが感じられ、学ばれることがあると思います。それを最大限利用していただきたい。プロ野球でオールスターゲームというのがある。新人選手が初めて選ばれるでしょ。コチコチになっっているそうです。ところが、本当の凶太い新人選手は、先輩のいいところを



全部盗み取りしようと思って、目をこらして——松井選手なんてそうだったらいい——一番凄い選手の横にどかんと坐って、すべてを聞き出していくという。そういう貪欲さ。御名ゆえの貪欲さ、それを皆さんお一人おひとりお持ちいただいて——これは自分が立派になるためではない——いかにもして、主さまのこの宝を他にわかち与えたい、そのためにこのちっぽけな器をどうぞお用いくださいという、そういう気持ちをもって集会に参加され、あるいは日曜集会に参加される。キリストがおっしゃったように、

「受くるよりも与うるは幸いなり」

という。受けるばかりで、欲しい欲しいでは進歩いたしません。我を忘れて、自分を献げて、そして、どうにかしてあの人を救ってあげてください、この人を助けてあげてくださいと、夢中で祈っていると、祈ってるその人がもの凄い祝福を受ける。己のためにとやっていたら、あまり祝福を受けないんです。

そういうのが、これまた私の何十年の経験法則であります。法律の世界では、経験法則というのが非常に大事にされる。経験法則違反は、破棄差戻しになります。「そんなものはダメだよ、やり直しだよ」と。そういう経験法則はどこにも書いてないので、皆さんがおのずと見いだしていただくものですけれども。

ロベルト・コツホ（1843～1910ドイツの医師、細菌学者）という、天然痘を克服するワクチンを作った人は、自分を実験台にしたそうです。奥さまを実験台にした。やつぱり、実験しなければできません。ヘタに他の人に実験することはできません。そうすると、自分でやり、奥さまでやる。私は福音の道にたずさわるといふことはそういうものだと思います。私はよく「実験」と言います。我々は未開拓のところを進んでいく。路なき路を進んでいく。皆さん、一人ひとりが実験台になってください。そこで実証されたら、他の人は安心してついてくる。皆さんはいろいろ個性がちがう。立場もちがう。いろんな立場、個性、環境の方々がどなたも、その人でなければ味わえない実験をなさり、そしてそれが全部その結果が、集約してみれば、すべて素晴らしいという。

昨日の感話会がそうでした。

「素晴らしい。キリストは素晴らしい」

と。そうなれば、初めての方々が安心して、

「ああいう方々がひたむきに信じているキリストなら、ついていこう」

と思います。人を見ます。必ず人を見えます。

「言っていることは素晴らしいけれども、あの人の実際を見てみると、とてもつい

て行く気になれない。冷たい、恐い、近寄りたくない、煙たい」

なんて。これではダメなんですよ。「吸い寄せられる」という言葉を昨日、何人かの方がおっしゃったけれども、キリストは吸い寄せてくださる方です。今度は、我々自身がキリストというお方の磁性を帯びますと、キリストに感化されますと、今度はまた人を吸い寄せ



るようになる。O姉妹が吸い寄せる存在になっておられますね、ああいう晩年は素晴らしいですよ。

キリスト者というのは、己のことは忘れていいんです。ひととおりの健康は大事にする。健康法はやってくださいよ、無茶はやってはいけません。S姉妹は痛々しいくらいに痩せておられましたけれども、あの方は本当に働きすぎだと思えます。やっぱり、自分の賜った身体は、御名のゆえに、福音のゆえに大事にすること、これは大事なんです。

けれども、そのひととおりのことを自分で心得ておれば、あとは本当に己を忘れて、御名のため、福音のため、他人のため、自分を献げていきますよ、もの凄い祝福が集まってくるんです。本当に集まってくる。これもまた実験です。そして、それを味わったら、それを宣伝してください。

「お金がいりませんよ。なくなったら、どこからか入ってきますよ」

と言って。本当にそうなんです。そういうことで、皆さんお一人おひとりがそういう実験をやっていたきたい。

それから、私のような立場になりますよ——皆さんは、それだったらやめておこうと思われるか知らないけれども——こういう集会のリーダーになるということは、また、こういう特別集会の責任を負わされるということは、ハッキリ申しまして、これはもう自分を十字架に架けるといふ、これなんです。いきさかも、自分とすることを思ったらできない。ハッキリ、ここでは自分を十字架につける。自分はさらしものになる。自分は、どんなに悪しざまに言われようと、どうなろうと、どんなことになろうと、それはもういいんだと。キリストが責任をとりたもう。為すのはキリストだということですよ。

私たちは、何も集会のリーダーだけではありません。一家の主としてであれ、また学校ではクラスの担任の先生として生徒の面倒をみるとか、いろいろな立場でも同じです。病院だってそうでしょう、看護婦さんもお医者さんも。そういうときに、これが大事なんです。自分を十字架につけて、己がどうなつたついでいいよ。

「主さま、あなたの御意がそこになつてください」

と。これが献げるといふことなんです。自分はどうなるだろうとか、成功するだろうかとか。やっぱり、集会がうまくいって欲しいんですよ、誰だってそう思いますよ。それを何も準備ができないで日が過ぎていく。しかも、無駄に過ごしているのではなくて、どうしてもしなければならぬことが次から次へと訪れてくる。そういうなかで——正にそれを「板挟み」と、こういうわけですね——身体がいくつあつても足りないとか。日にちを勘定しても、絶対に勘定が合わない。これをどうしてくれるかと。自分を十字架につけるしかないじゃありませんか。パウロは、

「私は常にイエスの死を身におびている。イエスの死は私のうちに働き、生命はあなた方の中に働く」



と、コリント後書4章で言っています。パウロは本当に、その意味で棄身です。

「イエス・キリストと一緒に十字架に付けられている」

というのは、飾りで言っているのではない。本当に日々、パウロは十字架で死んでいる。己が十字架で死んでいる。復活の生命は兄弟姉妹の中に現れている。

自分は何だ。人に踏みつけられる雑巾だよという。K君は小池先生のことを「雑巾だ」と言いましたよ（笑）。雑巾が拭いて拭いてボロボロになる。床はきれいになる。自分はボロボロに汚れて棄てられるという。先生は棄てられたわけではないけれども。K君は時々そういうことをポツと言うんですね、

「先生は雑巾だ」

と。ボロボロの雑巾だという。でも、そういうところに栄光が輝くんです。

●十字架で罪を赦す

『無者キリスト』にあるでしょ。「キリストの実存十転」と「人間の福音的七相」というのがあります。まず、破れ、砕け、それから突破・突入、聖霊の内住常燃、担い・抱き、棄身・棄石、そして最後は本願・栄光という。だから、先生の生涯も、棄身・棄石、そして最後は栄光ですよ。これが先生の92年の生涯の——途中はいろいろ苦しいこともあったでしょう。身からでた錆もあつたですよ、ハッキリ言いました——でも、それら全部を通して、棄身・棄石そして最後は栄光・玉成ぎよくせいです。玉と輝くという、そういうところへ展開していく。

使徒パウロであれ、ペテロであれ、ヨハネであれ、みんな私たちには身に親しいんです。国籍は違いますけれども、時代も違いますけれども、非常に親しい。小池先生はよく

「パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん」

と言って、親戚同様におっしゃっていましたよね（笑）。初めは、何ということをおっしゃる方かと思っただけでも、私は本当に今はそういう気持ちに近いです。先生も近い。非常に先生も近いです。人間的なまろもろなものは脱落して、光るものだけがそこに輝いているからなんです。こんなことを言うと、私ももう近いのかな、向こうへ往くのが（笑）。さつきの「使徒らの昔を」の歌詞に、

「暮韻ぼいんじょうじょう々……天使あも天降りて昇らせ給え！」

と書いてある。もうちよつと時間をくださいなんてね（笑）。

パウロは「日々に死す」と言いました。福音というのは、日々に死し、日々に復活し、そして御旨が成つていく。またこの十字架は、私は自分を十字架につけると言いました。これは私の側からの能動的な働きですけども、この十字架は、キリストからの十字架というのは、恵みとして、

「お前は全部片づいているよ、大丈夫だ、心配いらんよ」

という決定的な言葉です。「お前はすっかり片づいているよ」と。



私は第一回の集会から昨日まで、あまりこのことを言いませんでした。それは初めての方もいらつしやるし、いきなりこんなことを言ったって、それはわからない。けれども、ずっと今までこられて、

「何が秘密なんだろう、何が先生を生かしているんだろう、何が兄弟姉妹たちをあのように生き生きと生かしているんだろう？」

と。その奥義はこれなんです。十字架でキリストがあなたの方お一人おひとりの過去・現在・未来、全存在を——己自身、それから己から発するさまざまのこと、思いも、言葉も、行いも——赦してください。」「罪を赦す」というのは、何か思いとか、言葉とか、その行いにおいてまずかつたことを赦すという、そういうものではありません。それを含みつつ、もつと根源的に、そういう思いとか、悪しき心とか、人を傷つける言葉とか、やってはいけない行いとか、そんなものが出てしまふ、その根源は「自己」なんです。自己自身、そこからさまざまのものが発してくるわけでしょう。その一番根底を十字架で片づけた。古来のどの宗教も、それを片づけることができなかつたんです。

お釈迦さんは最後に、涅槃の境地というのはそれを克服されたんでしょう。ご自分を克服されたのみならず、お釈迦さんのところへやって来る者を全部抱きとつて、その境地へ引き入れようとなさつたんだと思います。だから、私はお釈迦さんは素晴らしい慈しみの愛の方だと思います。王子の身分を捨てて、本当に道を求めてさまよつて、ときには餓死寸前までいって、さまざまの霊的戦いをへて、最後に涅槃の境地に入られた。これは素晴らしいと思います。そして、みんなを抱こうとした。

そういうお釈迦さんの境地を、キリストはこの十字架で、私たち一人びとりに

「無条件で与えるよ」

と言つてくださる。お釈迦さまもキリストを知つておられたら、

「ああ、この方こそ私が求めていた方だ」

と、きつと悟られたと思う。けれども、残念ながら、世界が遠いですからね。どっちが先にお生まれになつたかは知らないけれども。キリストはアブラハムの生まれる前から天におられたのだけれども、地に現れられたのは遅かつたんでしょね。お互い地においては相知ることなかつたお方ですけども、今は天上で本当に抱き合つておられると思う。

「二人で力を合わせて本当のものを生み出そうではないか」

と。争い多いこの世を天界から本当に悲しんでおられると思う。宗教的な争いをやっている。己の教派が一番正しいとやっている。

「そんなものは狭いんだ、突き抜けようよ」

と、きつと、私はお釈迦さまもキリストさまも本当にそうやって、霊界からこの世を救おうと祈つておられると思う。

私たちが「キリスト、キリスト」と言いますのは、本当にキリストは具体的にその身をもつ



て十字架にかかって、そして贖いということのを全うしてください。この十字架がどれだけ凄いかということ、ちょっとやそつとでわかりません。生涯を通して、だんだんだんだん、その深き高さ広き凄さが刻み込まれてきます。これは知識ではわからないことです。生涯を通して、それがその人の中に刻み込まれていく。ついにパウロも、

「私は十字架せられたもうたキリスト・イエスのほかは何ものをも語るまじと心に決めた」

と言う。かれはアテネ伝道のとくに、ギリシア人は哲学を喜ぶ人たちですから、そこにギリシア人らしく彼は語りかけていった。素晴らしい演説ですよ、あのアレオパゴスという所で語ったのは。「知られざる神に」という像があった。

「あなた方が『知られざる神に』と言っているのは、実はエホバの神さまであり、それを現したのはキリストだ。そして、キリストは復活された」

と言ったら、みんな笑いだした。復活ということをやったので。それでみんな散って行った。

「お前のさえずりは今度また聞こう」

と。パウロの言葉を「さえずり」と言った。つまり、福音を愚かとしたわけです。そこで、パウロは意を決して、

「神はこの愚かをもつて人を救うをよしとしたまえり」

と、コリント人への第一の手紙に書いてますでしょ。

「知者を辱め、力ある者を空しくするために、世のそういった賢者たちを辱めるために、あえて世の愚者、力なき者、そういったこの世では相手にされない者を神は選ばれた」

と。それは彼らを——俗っぽく言えば——いわば愚弄せんためであると、そういうことをパウロは言いました。そして、2章で、

「私は十字架につけられ給いしままなるキリスト、それ以外は一切知るまじ」

と。今度はコリントに行つたときは、「自分は実は何か恐れがいつぱいあった」ということを言ってます。そして、「御霊と力の証明であつた」と。「キリストの十字架以外は一切語るまじと心に決めた」と言つた。コリント第一の1章18節に、

「¹⁸それ十字架の言は^{ことば}亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力なり。……²⁰智者いずこにか在る」（コリント前1・18〜20）

と、力強い言葉が続きます。ああいう言葉は体験に裏付けられて出てきている言葉です。決して、頭で考えた言葉ではありません。そういう必然の中で語られた言葉です。

そういう本当に生命賭けの御言を我々はいただいて、今あるんですからね。そのパウロの捕まえてくれた根源、十字架。キリストにもつとも逆らっていた、そのパウロをひっくり返して、根底から新たに、そして、キリストのまるで化身のごとき姿となって、愛の伝道を貫かした。その原動力はこの十字架にあったわけです。しかも、その十字架の



奥義をもっとも深く語ってくださったのが小池先生でした。

●現の中の現

私は、教会生活で聞いていた罪の赦しというのは、さきほど申しました、心の思い、言葉行い、そういった己から発する諸々の罪咎、それを赦すということでした。重ねて罪を犯さないようにと。だから、またやつてしまったときには、またお詫びをするという、その繰り返しです。そこからは爆発的な喜びは湧いてこなかったんです、私は残念ながらいつも、

「すみません、すみません、すみません」

の連続です。死に至るまで「すみません」と。これは辛いと思いました。ですから、心に平安がない。喜びがない。いつも、またやるんじゃないか、また罪を犯すのではないか、という恐れが常にあった。それを小池先生は、

「罪だ、思いだ、言葉だというのは、それを発する現象面にすぎない。その根源が大事だ。どこからそれが出てくるか。悪しき思いがどこから湧いてくるか。その泉、その源、これが己自身だ。だから、己自身が罪なんだ」

と言われた。己自身が罪だという。これはあまりにも酷い言葉ではありませんか。神の子としてつくられたお前が、存在そのものが罪だという。なんか、太宰治さんは

「生まれてきてすみません」
と言ったそうですね。

「生まれきてすみません。私はこの世に存在する意義がありません、価値がありません。せん。だから、私は静かに消え去ります」

という。つきつめたら、そこへいきます。己自身が罪だと。己は呪われたる者なるかなという事です。

それをK君が証言してくれた。K君は己自身を抹殺したかったんです。けれども、キリストはお赦しにならなかった。どんなに自動車事故を起こしてみても、車体は目茶苦茶に壊れていても、彼自身はほとんど無傷であった。「これは一体何だ？」と。

「お前は生きるべきである。生きよ。十字架でお前を全部片づけてある。わが意は、お前に私のこの生命を与えることだ。義を与えることだ。お前は義人だ。その代わり、私と離れてはダメだ。私がお前の中に宿って、お前と一つになった。それで新しく生きろ。古きお前は死んだ」

と。S君だつてそうですよ。R君だつてそうです。みんなそうやって、若いときは一途ですからね、この世の常識で測れない。この世の常識で測れる人はちゃんと立身出世していきますよ。世渡りが上手ですから。私なんか、人からみたら、立身出世しているように見えるけれども、自分はやっぱり同じような思いで若いときを過ごして、行き詰まって、自



分で命を断とうとまではいきませんでしたけれども、本当に思い詰めていましたので、キリストに会って救われた。だから、そこで一旦死んでいますからね。

そのようなことはすべて本質的なことではない。キリストが用い給うて、それぞれのポストに私を置かれた。ヨセフみたいなものです。ヨセフは宰相さいしやうまで行きました。エジプトの国を救い、そして、お父さんたち一族を救った。私はそういうふうと思う。私は何か縁があつて、そういった重要なポストに次々につけられましたけれども、それは自分の功績とか、自分が立派だからとか、つゆ思っていない。一度は死にし身でありますからね。それを御意によつて、そういうポストにつけて、そこで高いポストで光り輝けば多くの人が見ます。一隅を照らすという存在も大事です。けれどもまた、高いポストでこの世の人たちが、いわゆる立身出世の好きな人たちが望むポストにいて、

「私は立身出世なんか問題ではないんですよ」

と——言葉では言いません——存在をもつて、在り方をもつて、それで告白していきますときに、

「ああ、やはり、あの人を動かしているキリストは凄いな」

と、そのことをわかつていただけたらと思います。

そういうことで、私は自分自身としては、たくさん涙を流してそこを突き抜けようとしてくれた方々と同じ気持ちでいます。だから、兄弟姉妹と言えらるわけです。

その根底は何かというと十字架なんです。キリストは、

「十字架でお前はもう片づけられている。お前はもう絶対に大丈夫だ。その代わり、私とお前とは一つだからね。お前は私の弟子だよ」

とおっしゃってください。

「ありがとうございます。弟子にさせていただきましたか」

と。本当にそうですよ、

「ありがとうございます。入門を許されました」

と。だから、私は、同志社大学でも自己紹介のときに、

「私の恩師はキリストです」

と書く。

「私の導き手はキリストである。すべてのことを教え給う。私を導き給う。諸君たちもいい師に出会え。この世で生きている方でもいい。歴史上の人物でもいい。

誰か自分の師と呼べるものを捜しだせ。見いだせ。私にとつては、それはイエス・

キリストだ」

と書いている。「信じろ」なんて、一言も書かない。こうやって相對している間柄で、「信じろ」なんて言つたつて、信じなくなつてみんないらつしやるじゃないですか、つながっているじゃないですか。そういう思いです。



姿こそ見えないけれども、イエス・キリストと私とは、ちょうど小池先生と私のようなものです。先生は向こうへ往つたから信じるか、そんなことはないでしょ。先生はいつまでも先生で生きていらつしやるでしょ。イエス・キリストは、私の生まれたときには、もう向こうに往つてらつしやつたけれども、でも、いらつしやつた方だから、信じる必要はない。その方とつながれるわけです。向こうから十字架を通して近づいて来てくださったわけですからね。そういうふうにして、本当にリアルな世界です。

「現の中の現だ」

と小池先生はおつしやつた。「夢か幻か」ではない。現なんです。そうすると、この見ゆる世界が、これが「夢か現か」なんです。これは、天界を見てきた人はみんなそう告白しますよ。天界の素晴らしいさに比べては、この世の美しさというものは本当に夢幻の如き仮の姿にしか見えないということです。

●聖書は私の身分証明書

前置きが長くなってしまいましたけれども、このたびのこの特別集会は本当に、主は我々の思いを超えて、御業をなしてくださいました。これを、どうぞ、三日限りのものとしなくて三日限りにしたら、これは「三日坊主」という——三日坊主にならないで、本当にこれを起爆剤として、この三日を永遠の三日として、来年、主が許してくださいるなら、またここでお会いして、

「いやあ、一年間、素晴らしかったですよ」

と、みんなもう顔を輝かして、「感話証言の時間は六時間にしましょう」とか言って——「今年はしゃべらせてもらえなかった」という、ご不満の方がきつとたくさんいらつしやると思います。そのくらいに、私は「甲子園」と言いましたように、年一回の甲子園に、そういうところに、来年は喜び勇んで馳せ参じようと、今から来年に備えた祈りの生活をしていただく。甲子園で破れた選手たちは、その翌日からもうその次の甲子園を目指して練習を始めるそうです。一日たりとも休んだらもつたないという。なにも、「ねばならない」ではなくて、

「やらざるを得ない。やりたい。あんな負けかたして悔しい。来年こそは」

と。そういうことで、翌日から練習を始めるそうですよね。私たちは、そういうことで、ここを出発点として、更に大なる飛躍を目指していく。それも己のためではない。この御国のためにです。

これだけの福音がこのわが同胞に伝えられていないということは残念です。キリスト教はそれなりに世の中に知られていますけれども、このリアリティーをもつた、天国と直結した——しかも、何も要らないんです、我々のところは。暫定的な組織や暫定的な住まいもありましょう。けれども、永遠の御国は向こうにある——そういうところで、私たちは



正に大空を天幕とし、こういうところを神殿とし、霊と真をもつて拝する。そして、兄弟姉妹たちの中に御霊の愛が流れている。流れざるを得ない。

さつき私は、古き私は悪しき思いが湧き出づる泉だと言いましたが、今度は、聖霊の愛があふれる泉です。この流れであるものに触れたものはみんな癒されていく、癒し系なんです。我々は全部、癒し系の存在になるんです。今までは、呪われた者よと思っていた自分が、今度は、人々にとつて幸いなる存在となる。幸いなる存在です。だから、皆さんは、主にあつて自信を持つてください。それは古い自分に対する自信ではない。古い自分は葬つた。新しい自分、それはキリストがつくつてくださった。まぎれもないあなたでありながら、キリストの血が流れこんでいるんです。キリストの霊の血が流れこんでいる。「やっぱり、血は争えないね」なんてよく言いますね、遺伝的な面で。キリストという霊の血を受けた者は凄いいことになりますから。これはヨハネ伝に、

「その名を信ぜし者、その者は神の子となる権を与えたまえり。その人は血筋によらず、肉の願ひによらず、ただ神によりてのみ生まれたり」

とある。聖書の言葉はみんな私たちに対する証明書です。

「あなたはどんな人間？」

「新約聖書に全部、私の存在のことは証明されている。これが何よりの証明書です」と。そういうふう引用して答えられるぐらいに、皆さん、自分のものとして聖書を身につけてください。これは力強いですよ。

そして、自分たちの乏しい言葉で讚美ができないときに詩篇23篇の、

「主はわが牧者なり。われ乏しきことあらじ」

という言葉が口について出る。

「主はあなたの咎のすべてをゆるし、すべての病をいやし」

という詩篇103篇とか、イザヤ書53章とか、そういうものがひとりで迸り出るような、そういう御言が受肉した、化体した存在でいてくだされば、本当に何も恐れることはない。

●『福音の心臓』

今日の主題は最後の、愛です。「担いの愛」ということ。コリント前書13章を読んでいたきました。コリント人への第一の手紙です。これは、結婚式に行けば必ずここは読まれるところなんです。そういうことで、皆さんにはおなじみのところだと思います。結婚式で読まれるけれども、決して全文は読まれない。一部分だけしか読まれない。

このコリント前書13章については、『福音の心臓』（曠愛新書第1号 1964年刊）という冊子、これは小諸の夏季特別集会の第一回集会だと思っんですが、そこで小池先生がお話になった。それがまとめられたのが『福音の心臓』です。詳しくはこれをご覧ください、先生の願ひがここにこめられています。先生は何でも、第1巻とか、第1号とか、そういうも



のには一番素晴らしいものをポーンと持つてこられる。この『曠愛新書』というのは、先生が東大を停年退官されまして、一応今までの大学教授という立場を退かれた。それまでは『曠野の愛』誌というのを出しておられた。これは37号でピリオドを打たれた。37号は緑色の表紙で、「東大停年退官講義、宗教と文化」というのが載っている。それでピリオドを打って、新しい意気込みをもって、この『曠愛新書』を出された。その第1号がこの『福音の心臓（コリント前書13章）』なんです。ですから、いかに先生がこのコリント前書13章を大事にしておられるかということがわかります。新しい伝道生活への第1号がまずこれだったということですよ。

先生は集会の場所も、婦選会館という新宿の——市川房枝さんの記念会館のようですよけれども——そこに場所を移して、マルコ伝1章からずっと講義をなさった。先生はすべて新しい気持ちで始められた。そういう記念のものです。それから、あるときから『ハレルヤ』という一枚ものの刷りものをタイプ印刷でお出しになりましたけれども。世に向かつてはこの曠愛新書です。残念ながら、第6号までで終わっています。第6号は『キリスト道』（1967年刊）です。これは、どれもこれも珠玉のものですから、著作集とはまた別に、ハンディなものとしてお読みになることをお勧めします。それから、こういったものには必ず編集後記がついてまして、先生のいわば、いついつどこへ行つてどんな伝道してきた、今度はどこへ行つてこんな話をするんだという、いわば先生の年史——日記ではありませんが——いわば年史のかたちで付されている箇所があります。そういうものを読むと、あああの時、先生はこういうことをなさっていたんだな、こういうことを思っておられたんだなという、そういう歴史的なことがまたよくわかります。そういうことで、いろんなものをご活用なさるようにお勧めいたします。

● 十字架の下で握手

さて、このコリント前書の13章に入ります。

「たとい我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、

これは「異言」とか言われるものです。初めて集会に来られた方は驚かれたと思いますけれども、何人かの方は祈っておられると、自然に舌がこういった異邦の言葉で神を讃美してしまうということがある。意図的ではないと思いますけれども。小池先生もよく、お話の途中でも異言が変わってしまったりして、先生はそれを押さえるのに非常に苦労しておられた。

先生が「十字架」ということをおっしゃるときは、すぐ異言が出てくる。先生は十字架ということをおっしゃるときはいつも、その中に自分が入り込んで、その十字架の中からものをおっしゃるものですから、何十回、十字架のことをお話しになっても、先生にとつては毎回新しいんです。本当に毎回新しい。そして、時にはもう平伏して、「主さまー」と言っ



て涙を流して、十字架を告白しておられた。ということは逆に、先生にとつてはどれだけ十字架が必要であったか。十字架の御赦し、贖いなくしては立てない自分だということをよく自覚しておられたということです。だから、どんな先生のマイナス面も全部それで赦され、担われ、贖われている。これをまた先生は力強く告白していかれた。その面だけ見てください、

「なんだ、先生は、十字架でみんな赦されて、ケロッとしているのか。凶太いやつだ」と、こういうふうな誤解を招いてしまったんですよ。でも、人の前ではそうやって、

「私は十字架で赦されています」

という、そっちの面をおっしゃるけれども、裏の面では、十字架の前でどれだけ平伏して涙して祈っておられるか、その面は隠されているんです。そして、十字架を突き抜けて、贖われたご自分をぶつけておられる。だから、

「キリストの前にばかり謝らないで、私にも謝ってよ！」

なんて思われた方もいらつしやるわけですよ（笑）。人間的な弱さによつて時には、癩癩玉を爆発したりとか、誤解して叱りつけたりとか、どなりつけたりとかすることがありますと、誤解された者は傷つきますよね。その他さまざまそういう躓きの存在でした。それに気付いて一人ひとりのところに行つて、頭を下げてお詫びなさればいいのに、先生はキリストにお詫びして、他の方には直接おっしゃらないものだから。そして、

「私は十字架で赦されているんです」

とニコニコしていたら、他の人はたまらんわけですね、

「なんだ、自分ばかりいい気持ちになつて、私のこの痛みはわからないのか」

と。先生は言われた、

「どんな問題も十字架へ持つていつてください。十字架の下で握手しましょう。人間が人間を直接ゆるしたりすることはできないんだ。十字架だけがすべてを担い、すべてを包み、ゆるして下さるんだから」

と。コリント前書で結論的に出てきますね、

「愛は一切を担い、すべてを望み、すべてを信じ」

という、それを先生はご自分のそういう姿で表される。けれどもその反面、隠されたものが表に出ないものだから、多くの方が躓いて集会を去つたりなさいました。実に、痛みがありました。でも、その人たちのことを先生は陰でいつも祈っておられる。帰ってきて欲しいと。明治気質の人だから、自分から「すまん」とおっしゃれないんですね。ま、私の受けた先生というのはそういうお方でした。

●四つの非ず

この十字架が本当にすべてを担い、すべてを赦し、私たちを一切新たにしてください



います。異言のことからそういうことになりましたが。たとえば、そうやって、異言がほとんどばしりであろうと、御使の御言を賜ってこれを語ろうと。でも、その語り手に愛がなかったら、**愛なくば鳴る鐘や響く鏡鉢（にようはち）の如し。**

それはやかましいドラや太鼓に等しいんだと。また、

²たといわれ預言する能力（ちから）あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、

預言する力、これも素晴らしいことですよ。14章では、「預言する力を求めよ」と書いてあります。「すべての奥義と凡ての知識」、こんなものは達せられるはずがありませんが、しかし、仮にそういったものに到達したとしても、更には、

また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。」（コリント前書13・1〜2）

「山を移すほどの信仰」なんて、これは譬話（たとえはなし）にしる——キリストご自身がおっしゃった、

「本当に信じて疑わなければ、この山に向かいて、動け、海に入れと言ったら、

山は動く。神にありては不可能はない」

「芥種（からしだね）一粒の信、芥子粒みたいな信があれば、山に向かいて海に入れと言う

とも、それは動く。信じて疑わずば」

と、そういうことをキリストはおっしゃった。それをここでは引いているんだと思います。たとえば、山を移すほどの、あつと驚くような、そういう信仰があるうとも、もしも、愛がなければ、それは数うるに足らずと。

私はここを読んだときに、本当の信仰は愛に裏付けられた信仰であるから、そういう本当の信仰があつてこそ山が動くんだから、信仰があつて山が動くので、愛がないというのはありえないと思つたんです。今も若干、思っています。けれども、おそらくここで言っているのは、霊力ですね。悪魔も賢いですから、智慧を持っています。智慧を授けます。知識を授けます。悪魔はまたいろんな奇蹟の業をすることができます。だから、たとえばそういういた、キリストならざる霊の力で山が動くうとも、人が動くうとも、奇蹟の業を起こすうとも、本当の愛がなければ、それは何の意味もない。

キリストがああ荒野の試みで、

「奇蹟をせよ」

と、サタンから誘われましたけれども、それを拒否されました。サタンは奇蹟をすることができます。サタンは、

「手を組もう」

と言つて誘つてきました。手つとり早く人々を感化する方法を二人で考えようというわけですね。サタンは悪智慧をもつて考える。キリストは愛をもつてなされる。悪智慧と愛がくつついたら、もうこわいものなしだというわけですよ。ところが、キリストは断乎退けられた。



そういうことで、宗教の世界ではいろんな現象が起りますから。霊能者というのはいっぱいいますからね、世の中に。その霊能に惑わされたらいけません。小池先生は、

「霊力的宗教か、道念的福音か」

という、短い論説（「曠野の愛」第34号1960年晩夏号）を書かれました。これは1960年、伊香保で特別集会をもたれたときに配られたものだったと思います。昭和35年の晩夏号です。そこに、わずか2頁の短い論説なんです。私は『キリスト告白録』第2号（「霊の貧者」2004年刊）で、四つの気をつけなくてはならないものがあるというところを書きました。先生が常々言っておられた。それは、パリサイ根性、観念信仰、御利益信仰、それから霊力的宗教（霊的傲慢）です。そういった四つのものに気をつけろということをおっしゃったことを書いた。ここで先生が言っておられることは、

「そういったいろんな宗教的現象、霊力によっていろいろ起ること、それに惑わされるな。その霊が本当にキリストから来ている霊か、十字架を通ってきている霊か、それを見分けろ。十字架を通ってくる霊は聖い霊で、それは安心できるけれども、十字架を通らない霊は、どんな霊的現象を起こし、あつと驚かせるようなことをやってみせるところで、そんなものには絶対について行つてはいけません」と。ところが、人はそういう現象に惑わされる。

「これは素晴らしい。素晴らしい教祖だ。ついて行こう。これへ行けばどんな病気も治る。癒しを求めてここへ行こう」

とか。それは非常にあぶない。キリストの道は、その意味では、狭き門、細き道です。でも、そこをくぐり抜けたら、実に広々とした生命のあふれる世界です。

ご覧なさい。世の宗教で、たくさんお金を集めて、立派な寺院を建て、諸々のそういう行事をやつて、人を引きつけているものがたくさんあります。私たちにとっては、十字架がない宗教というのは、どんなにそれが善きものであっても、それは結局肉から出たもので、限界があります。全部否定はいたしません。でも、そこには限界があります。私たちは、この根源的な解決を根源的にしてください。そういうお方だけに従っていく。大体、金があるかとか、病気が治るとか、そういうこの世的な、いわゆる御利益ごりやくというものが出てくる宗教というのは、まず警戒しないといけない。そういう宗教は、今度はまたお金をどんどんせびります。

「大寺院を建てるので百万円出さない」

とか。出せないと云ったら、

「あなたは呪われますよ」

とか、こういうふうだね。仏教だつてそうですよ。お寺を守っていくために寺院を再建しなければならぬ。そうしたら、壇徒の人たちにお金を集めざるを得ない。そうすると、百万円ぐらいは当たり前なんです。



「今までのご恩を考えてみる。百万円ぐらい安いものではないか。なんていうことになってきますから。この世的な幸せ、幸福、いわゆるそういったものを保証する宗教は偽物です。キリストの道は、

「私に従ってきなさい。必要なものはすべて添えて与えられる」という。幸福を目的として目指すのではないんです。幸福というのは、キリストと一つにされ、神さまとの間に本当の一如一体、愛の關係が成り立ったときに、平和な關係が成り立ったときにしみじみと感ぜられるものが幸福なんです。

本当の自由、それは金にも支配されず、物欲にも支配されず、その他自分の情況が健康であろうがなかろうが、そういった一切の外的な環境の如何に左右されない絶対的なもの、絶対次元からくるもの、滅びないもの、その境地の中に生きているのが自由なんです。パウロはピリピ書の中で、

「私は一切の秘訣を得た。富に居る道も貧に居る道も、高きに居る道も低きに居る道も、一切のそれらのものを乗り越える本当の秘訣を得た。すべての乏しきを神さまは豊かに満たしてください」

と言っている。ピリピの兄弟たちは貧乏だったけれども、本当にパウロには献げたようですね。だから、パウロはピリピの兄弟たちを「恋しい兄弟姉妹よ」と、恋人のように呼びかけている。本当に小さいけれども、呼びかけている。あのパウロのピリピ書は素晴らしいですから、さすがに小池先生が『曠野新書』第7号として書こうとなさったけれども、実現しなかった。それが「一切の秘訣」ということ。本当の自由ということですよ。

●愛（私）は寛容にして慈悲あり

そういうことで、霊力宗教というものには気をつけてください。

「³たとえ我わが財産をことごとく施し、又わが^{からだ}体を焼かるる為^{わた}に付すとも、愛なくば我に益なし。

殉教の死と言いましようか、焼身自殺ということ。何かにプロテストして焼身自殺を遂げる。あるいは、全財産を貧しい人に施す。こんなものは愛がなければできないと思いますけれども。でも、仮にそういうことをやってみても、本当の愛がなければ、それは全く空しいことだと。そして、

4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、^{おこ}驕らず、5 非礼を行わず、己の利を求めず、憤おらず、人の悪を^{おも}念わず、6 不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、7 凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。愛は長久^{いっ}までも絶ゆることなし。」（コリント前13・3〜8）

この「愛は寛容にして……」という「愛は」のところへ「私は」と置き替えてください、大胆に。



「私は寛容にして慈悲あり」

と。手放しでは言えませんよ。わがうちにありたもうキリストは私をそのような人間にしてください。私の中に在す^{いま}キリストはそういうお方である。そういうお方が宿としている私は宮である。そしたら、宮らしくならねばならないですね。

「わが中なる^{うち}キリストは素晴らしいけれども、私はそれとは似ても似つかぬ存在だ」と自慢してても、それはダメです。キリストと本当に一如一体となっていたたく。ですから、大胆に、

「私は寛容です。私は慈悲があります。私は妬みません。私は誇りません」

と言う。だんだん、恥ずかしくなつて、逃げだしたくなるんだけど。まあ一応、恥をしのんでやってください。

ここを「キリストは」と当てはめる人はたくさんいます。牧師先生方はそう言う。

「キリストは愛そのものだから、この『愛は』というのはキリストを当てはめたら

いいんだよ」

と言われると、みんな

「そうだ、そうだ。素晴らしい、キリストは」

と言っているけれども、私は

「あなたご自身の名前を入れてください」

と言いたい。恥ずかしくて逃げだしたくなるけれども、でも、そこへ行かないとダメですよ、本当に。キリストはそういうふうにしてくださるのだから。

「あなた方の中にキリストの形が成るまではやまない」

と、キリストの熱心はそうおっしゃってくださるんです。あなた方を本当に愛の人にしよう。ですから、恥ずかしいけれども、そういうふうにして、

「私は寛容である。私は慈悲がある。私は妬まない。私は誇らない。私は驕らない。」

私は非礼を行わない。

失礼なことを、礼に反したことはしない。

己の利を求めません。憤りません。

おこりつぽいけれども、怒りません。

人の悪を念いません」

と。これは大事なんです。人は誤解するのが得意ですよ。本当に人は誤解の名人です。これは六解になつてください（笑）。誤解で止まったらダメですよ。悪い人なのに善い人だというふうに誤解するのはまだ許されます。これは騙^{だま}される方ですけれどもね。小池先生みたいに、騙されやすい人ですけれども。まだ、その誤解ならいいんだけど、大体、人を悪く悪く思う。これがもう、人の得意中の得意なんです。人間関係はみんなこれで壊れていく。職場であろうと、家族であろうとみんな。



大体、嫁さんの悪口を言いますね、お姑さんは。その悪口も、「家風に合わん」と言われてきたんです。合いつこないんですよ、育ちが違うんだものね。それが、

「家風に合わん、うちの嫁は」

と言って、ボロクソに言う。うつぶんを晴らしているのかなと思えますけれども。

まあ、そういうことでね、人間性は、人の悪を思うのは得意中の得意なんです。それが当たり前なんですけれども、キリストなるお方が宿られますと、

「私は人の悪を思わない。常に人の善きことを思う。願う、祈る」

という、これはもう祈りになってきます。「人の悪を思わず」というのは、我々人間にとっては、祈りなくしてはありえないです。悪を思ってしまうんですよ。悪い方へ、悪い方へと思ってしまうんですよ。「ひよつとしたら…」なんてね。でも、「信じぬく」というのは、そこから「信じぬく」ということが出てくるわけですよ。皆さんは、お子さんたちを。ハズバンドであったり、ワイフであったり、そういう方々にしても。それも根拠なくではないんです。何となく、それとなく、話が伝わってきたりね。ワイシャツに口紅の跡があったりとかね、よくドラマにありますね（笑）。そうしたら、もう角がはえて、玄関に入るなり、ガンと。それなんか、もう悪を思っているわけですね。

だから、やっぱり、「人の悪を思わず」とは、キリストはその姿をとられたですよ。

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分のしていることがわからないのです」

と。人々のことは100%ご存知なんですよ、悪も全部ご存知なんです。にもかかわらず、その悪を思わないで、善を祈っておられるという、それがキリストの凄い担いの愛ですよ。これは人間はできません。これはもう十字架で降参して、

「私にはできません。自分の名を当てはめてここまで来たけれども、もうこの辺で

逃げ出さざるを得ません」

ということになる。

●十字架の凄さ

でも、本当にキリストのお姿というのは、我々の生身の人間をはるかに超えた姿です。

「汝の敵を愛せよ」

と。人が語ったら、きぎに聞こえます。キリストはそれをなされたもの、十字架の上で。おいしいものを食べながら、「汝の敵を愛せよ」とおっしゃったのではないんです。十字架の上で、本当にあの苦しみの中で、あれだけでも大変だと思っんです。手に五寸釘が打ち込まれ、足にも五寸釘が、それだけで、

「このバカッターが。お前らすべて死んでしまえ。滅びろ。バカヤロー！」
と、それで当たり前なんですよ、人間は。それを、

「父よ、彼らを赦し給え。彼らはその為すところを知らざればなり」



なんて言われた。

わが身になって、わが身が十字架につけられたら、一発どつかれただけだって、私はどれだけ腹がたつか。理由もなく、どつかれたらですよ。自分が悪いことをして、どつかれるのは、これは当たり前ですよ。でも、誤解されていきなりポカーンとやられたら、おやじであつても、殴り返したくなりますよ。そういう人間ですよ。でも、キリストはそういうものを全部のりこえて、この「悪を思わない」ということを実践して、そして、

「お前たちにはできないだろう。そんなことはわかつているよ。できない、それを可能にしてあげるのが御霊の力だよ。肉の力ではダメだよ。御霊は一切を可能にしてくださいる原始力だ」

とおっしゃってくださいる。

「み霊のわが主はわが身を抱き、十字架に耐え得る力を賜う」

という、そういう御霊です。御霊があなたの新しい我なんです。古き我は滅びた。

「新しき我というのはどんなんですか？」

と。御霊ですから。御霊の後ろにこつそり私の霊は、腰ぎんちゃくのようにくつついてるんです、金魚のふんのように。表には御霊が出てくださっている。御霊の背後に自分の霊がくつついている姿。御霊が私たちの古き人間性をもとせずに絶えず進みたもう。だから、小池先生は、

「人間小池を見ないでくれ。御霊のキリストを、うちなるキリスト、背後にいらつしやるキリスト、それだけを見てくれ。人間小池は死に至るまで罪びとだ」

と、口をすっぱくしておっしゃいましたね。私だって同じです。皆さんも同じです。

この肉の体には、肉の体の法則があります。この肉の体の法則というのは、死に至るまでは終わらない。けれども、それによつて牛耳られて翻弄されない。それが我々のありがたきなんです。肉の体は肉の体でいてもいい。そんなものはもう仮の姿だと。

本当のあなた、本当の新しく生まれたあなたはそんなものじゃない。本当のあなたは輝いているんです。それをキリストは信じぬいてくださいました。父なる神さまは信じぬいてくださる。父なる神さまは私たちを見てくださるときに、キリストの十字架の後ろにいる私を見てくださるから、十字架で全部、ふっ飛んでいるんです。十字架ですっかり綺麗になつた私というものを見てくださっている。古い私というものはもう消えてないんですから、神さまの目から見たら。だから、人間として生きているあいだは、古いものが残つていても、そんなことに囚われなくてください。

「まだこんな古いものがあるんですけれども、それでも救われているんでしょうか

「あつたりまえだよ。十字架の凄さを知らんのかね、君は」

と、こう言いたいですよね。



●キリストの無

親鸞の弟子が

「こんなありがたい教えをいただきながら、やっぱり自分には**つぶや**の心が出てくるんです。嬉しい嬉しいという心が全然出てこないことがある。祈れないことがあるんです」

と言ったら、親鸞はすかさず、

「だから、いよいよ**みだ**の彌陀の本願はまことなり」

と、こう言っただけです。

「そういうお前を救い上げるのが彌陀の本願の**ごうりき**ではないか。いよいよ、彌陀の本願は確かなり」

と。何をぶつけていっても、「だからこそ、いよいよ……」と、親鸞は言うんです。これは凄いですね。私はその『歎異抄』を借用して、

「十字架のこの贖いの力というのは凄いです。どんなお前であつても、そんなものは問題にしない。問題にしているそういう相対的なものならば、そんなものは救いにならない。絶対というのはそういうことだ」

と言いたい。この「絶対」ということ。この「対」というのは私たちです、相手のことを「対」という。その相手がどうであろうと、そんなことには絶している。超越している。どんな姿であろうが。つまり、あらゆる条件がなにもない。無条件なんです。条件は無いんです。もうこの御霊のキリストがおいでになつたら、

「あなたは新しく造られたものだ。あなたの中に御霊が成長していてくださる。もうその他のことは一切、問題ではない。常に同じ愛が注がれて、同じ慈しみの目が注がれて、同じ御力がいよいよ働いていく。だから、私だけを見ていきなさい」

という。これがキリストの我々に対するメッセージですから。人間的な思いでキリストを制限してはいけない。無限無量なるキリストを有限なる私たちが自分の量りではかつて、「キリストとはこのくらいだろうか」とか測っている。

「井の中の蛙^{かわず}」というお話がありますね。

「何か地上にはでつかい動物がいるそうだし、

その井の中の蛙^{かえる}は、

「こんなに大きいか、こんなに大きいか」

と、自分のお腹をどんどん膨らませて、とうとうパンクしてしまつた。そういう話がありましたね。井の中の蛙は井戸の中だけしか知らないからね。井戸以外の地上の、あるいは大空のそういう広やかな世界を知らないから、自分の中だけで測っている。

「あなた方は自分の測る量りでもって測られる」

という言葉がマタイ伝の中にでてきます。



「キリストはこのくらいの方だろう」

と思つたら、それだけの方です。「キリストはこれだけだ」と思つたら、そんなお方。

「キリストは無限無量だ」

と言つたら、無限無量なんです。それで、小池先生は「無」とおっしゃった。「無」というのは何かというと、「限定できない」ということです。限定する言葉がみつからない。無という言葉で表現するしかない。「無は無限無量だ」ということ。だから、「無者キリスト」とおっしゃった。

それから更に、そのキリストの無はどこから出てくるか、無限無量はどこから出てくるかというところ、キリストは神さまの前に自分を空っぽにして己を投げだしておられる。ナッシングに。これは本当の空っぽということ、ゼロです。ゼロなるキリストに無限大なる或るお方が入ってこられた。それは神さまです。霊なる神さまが入ってこられた。だから、天国は、キリストという有限なるお方の中に無限無量が突入して、キリストをとつぱらつてしまった。イエスさまという肉の姿をとつぱらつた、霊なるキリストは無限無量なんです。それが弟子たちからは見えない。ましてやユダヤ人からは見えないから、「あれはヨセフの子であつて、どうであつて」という、外側のことしか見えない。だから、キリストのやることが為すことが不思議な業であつて、業が不思議だったらまだいいんですが、その語られる言葉が表面的に律法に反したことをおっしゃられた。キリストは安息日を破つておられた。

「父と我は一つなり」

とおっしゃった。「これは神を冒瀆する」というふうには、すべて、自分の測る量りでキリストを見たから、彼らはみんな躓いた。弟子たちは時々、そういう目で見ただけでも、キリストの御業を見て驚いたとある。

「ああ、これは実に神の子だ」

とか、波を鎮め、風を鎮めたもうた時に、「げに、この人は神の子だ」とか、時々、ハッとさせられるんだけど、また時々忘れてしまつて、自分の尺度でキリストを測る。そんなことが福音書に出てきます。

●自分を問題にしない

ですから、私たちは、そういう大いなるお方の前に出るときは、自分というものを否定しないといけません。自分の先入観とか、自分が今まで何十年勉強してきて、こんな生活を体験してきて、こうだったんだからという、その尺度で測ったら、これはもうダメなんです。学者の方々というのは、残念ながらそういう自分の尺度で測ろうとする。しかも、その「自分」というのは単に自分だけではなくて、今まで数百年にわたつて続けられてきた学問的、哲学的、さまざまな積み重ねがあります。しかし、そういうものをバックにひ



かえて、それで神さまをとらえようとすると、これはダメです。ましてや、ちっぽけな自分の今までの経験だとか、考えだとか、人生観とか、そんなもので、この無限無量なる方に立ち向かうということは、それこそ愚かなりということなんです。実に愚かなることです。そのことに気付いたら、私たちは本当に賢い人間なんですよ、そのことを知っているんだから。そして、賢い人間はどうするかというと、

「主さま、あなたは凄い。本当に凄い。こんなちっぽけなものを問題にしていた自分が恥ずかしい。だからもう、自分を問題にしません。しても始まらない。だから、あなたさまが十全に働いて、どんどん展開してください」

と。しかし、我を顧みるとき、そこに何かひとつの戸惑いがあります。私のような者ではないだろうか。その「私のようなもので」ということにまたこだわらる。もう「私のようなもの」と言わせないものがここにありますから。キリストは言われる。

「無条件に、あなたは神の子だ。わが十字架の贖いのゆえに。無条件にあなたは自由だ。絶対の自由を賜っている。わが十字架の上において」

と。「その中身は何ですか？」と問えば、

「御霊、キリストの霊、これがあなたの方の中に宿る。これであなた方は本当の自由になる。その中に入れていただき、生命の中に入れていただき、確かな希望をいただいて、そして進んでいく」

と。そのあなたの方の中に宿っている霊は愛の霊である。愛の霊ですから。先程の、

「愛は寛容にして慈悲あり」

というのは、

「わがうちに居給う御霊のキリストは寛容にして慈悲あり」

というふうに、

「己はダメだけれども、わがうちに居給うキリストは寛容にして慈悲あり。私はその前にぶつつぶれていますので、もう私は問題ではありません」

というくらいの気持ちでここをお読みになってください。これは祝福の言葉ですから。

「あなたはこういうものです。もう本質的にそうなんだ。あなたは寛容なんだよ、あなたは慈悲がある。妬まないんだよ。妬むなんて、あなたに相応しくない。神の子なんだもの。誇らないんだよ。誇る人間はちっぽけなんだ。本当の大きなものに触れてないから、自分を誇ってしまうんだ。本当の方にふれたら、謙へりくだらざるを得ない。高ぶるなんてとつてもできやしない。人の悪を思わない。そして、不義は喜ばない。義を喜ぶことはあつても、不義は喜ばない」

と。そして、

「おおよそ7 凡おおよそそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。

どんなことがあつても、めげない。一時的なことであつて、屈しない。



この「凡そ事忍び」というのは、忍耐する希望——希望は忍耐と結びつくということを示しましたね、「望みの忍耐」とか——忍耐して待つ、そういう望みとか。そういうふうには、新天新地が到来するまでは、本当に私たちには涙がある。しかし、それを担いぬいていく。耐えぬいていく。それに勝っていく。

そういう力が御霊から流れてくる。そして、信じぬく。どんな悪い知らせがきても、それによって左右されない。

「ヤイロさん、お嬢さんがお亡くなりになりました。もう、先生をわずらわせてもダメです」

「いやいや、大丈夫だ。最後まで信じぬきなさい」

と、イエスさまはヤイロを励まされた。

「はいっ、わかりました」

と、ついて行きます。そして、その通りになりました。その通りにしてくださいました。ヤイロを裏切られなかったんです。せつかく、自分のところに頼みに来たヤイロでしょ。「よしっ」と言って引き受けられた。最後まで貫かれた。たとえば、お嬢さんが亡くなったという現実があったって、それをひっくり返してしまわれた。それだけの力あるキリストなんです。そのキリストに私たちは全托して進むんです。

● 確かな希望

ですから、信じぬくということ。それから、望みぬく。そして、耐えていく。担っていく。この「耐える」というのは「人を担ぎあげていく、担っていく」という、そっちの方の「耐える」ですね。そして、こういう愛はいつまでも絶えることはない。

8 愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。

これは一時的なものです。役割を終えるならば、それはなくなる。しかし、愛はいつまでも絶えることがない。

9 それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず、10 全き者の来らん時は全からぬもの廃らん。

私たちが今知っていることはごくわずかである。しかし、全き者が来る時には私たちはすべてを知るようになる。

11 われ童子の時わらわは語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。12 今われらは鏡をもて見るごとく見るところおぼろなり。

昔の鏡は実におぼろにしか映らなかったようです。そういう鏡に映すようにおぼろであった。



然れど、かの時には顔を対^{あわ}せて相見ん。

しかし、その時、御国が来たる時、キリストにお会いできるとき、その時には、顔と顔を合^あわせて相見ると言う。

今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。」（コリント前13・7〜12）

私の方のことは向こうからは全部ご存知なんです。向こうは全部ご存知なんです。だけど、こつちからはかすかにしか見えない。それが現実なんです。それが、かの時にはハッキリと等しく見えるようになる。向こうがこちらを知ってくださっているように、私の方もキリストさまのことを全部知るような、そういう時がやってくる。どんなに凄^あいことだろうかと思う。今だって、かなりの部分で、かなりの度合いで、私たちはキリストさまのありがたさ、慈しみ、愛、これを味わっています。けれども、それはほんのまだかけらだとかの時には、どんなに素晴らしいか。それが我々の希望なんですよ。確かな希望なんです。

ヨハネの第一の手紙にも3章に出てきます。

「あなた方は今や神の子である。後いかん、未だ知られず。しかし、キリストが来たもう時に、あなた方はその似姿に変えられていく。だから、私たちは地上にあつてデタラメな生活をしない。私たちの生活を律し、清め、神の子にふさわしい生活をする。これは希望に支えられているからだ」

と。ちよつと、ヨハネの第一の手紙の第3章を見ましょう。

「一視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と称えらる。

既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。2愛する

者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、

我々の本当の姿は今隠されている。私たちはやがて白鳥になるんです。今は醜いあひるの子かもしれません。でも、やがて素晴らしい姿に変貌するんです。それはまだ顕れていない。

主の現れたもう時われら之に肖^にんことを知る。

主の似姿に化せられる。これはピリピ書でもそうです。エペソ書でもみなそのことが、パウロ書簡で告白されていますし、このヨハネ書簡でもそういうふう^にに告白されています。

我らその真の状を見るべければなり」（ヨハネ一3：1〜2）

キリストさまに出会つと、そのキリストさまの光で同じ姿に我々は化せられる。

感化力と言いますね、

「朱に交われれば赤くなる。だから、良いお友だちと交わりなさい」

と。孟子のお母さんは、住まいを三度変えたと言います。そういうふう^にに、やつぱり、交わる者によつて凄く影響を我々は受けるでしょ。いい先生に出会えば、いい先生の感化を受ける。ご両親が素晴らしければ、多分、お子さまは素晴らしいでしょう。ということとは逆に、お子さまがで^きがわるいということは（笑）。それ以上は言いませんけれども。



要するに感化力があるんですね。キリストというお方は、今でも我々に対する感化力はそのすごくありますよ、キリストは。御霊が宿り、そして御霊の執り成しによって、我々は日々に変貌させられているんです、今だって。けれども、その時、

「かの時は本当にキリストと同じ姿に化せられる」という。これは凄い希望です。

小池先生が、ここでピリピ書をお話してくださった時に、文殊菩薩もんじゆの話がされたんです。文殊がお釈迦さんのところでの夏の研修会に出た。夏季学校、林間学校です。それで、みんなそれぞれ宿題をかかえて一生懸命にやっているわけです。ところが、文殊は一晩こっそりぬけでて、夜の巷ちまたに行ってきた。そして、朝、のこのこ帰ってきた。そこで、弟子どもが怒って、

「あいつは不埒ふらちなやつだ。こともあろうに、この研修会をさぼって、夜の街へ行ってきた。けしからん。みんなでやつつけろ」

と言って、打とうとした。ところが、打てないんですよ、みんな痺しびれてしまってたね。

「並なみいるもの、悉ことごとくく文殊となれり」

という、そういうお話がある。文殊は伝道に行っていた。お釈迦さまの救い、力、愛、それを伝えるに、遊女たちとか、そういう人たちのところへ行行って、伝道してきたというわけです。お釈迦さんはそのことがわかっているものだから。もちろん、弟子も自分勝手に打とうとはしなかった。

「お釈迦さま、いいですよ、こいつをやっつけますよ。俺たちは腹がたつて仕方がありません。一人いい目してきて。やっつけましょう」

「うむ、いいだろう。やりたまえ」

と、お釈迦さんはお許しになった。それで、やろうとしたけれども、痺しびれてしまつて打てなかった。しかも、

「並なみいる者ことごとく、文殊となれり」

という。私は非常にそのお話に感動いたしました。

そのように、私たちは今度、キリストに出会います時には、

「我々はことごとくキリストとなれり。小さなキリストとなれり」と、そういう姿が天国の姿です。

しかも、この世でどんな痛みを持っている方々も、身体の不自由な方々も、向こうでは本当に健やかにされる。イザヤ書35章に約束されている通りに、そういう姿が成就する。これが私たちの確かな希望なんです。

●最も大いなる愛

その実体は、ここにありますように、



「此の奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望なり」（コロサイ1・27）と。そして、さきほどのヨハネ第一の手紙の3章の続きを申し上げますと、

「²……主の現れたもう時われら之に肖んことを知る。我らその真の状を見るべければなり。³凡て主による此の希望を懐く者は、その清きがごとく己を潔くす」（ヨハネ13・2〜3）

主さまの、神の子らしい、そういう生き方をする。二枚舌を使わない。二心はいだかない。いわんや、身をもちくずすなんていうことは無縁だ。そういう生活をやらせてくださる。パウロだつて言ってます。肉のわざはこんなものだと言つて、ざあつと並べていましたね、ガラテヤ書で。こんなものは神の国とは全く無縁である。こういうことの中に埋没する者は神の国を継ぐことはできないと、ハッキリ言ってます。そして、

「御霊の実は、愛、寛容、柔和、節制、忠実、云々」

とあがっていました。そういうことは御霊が結ばせてくださる我々の実なんです。御霊にゆだねていけば、そういう実を結ばせてくださる。そういうことですね。それから、コリント前書13章へもう一度もどります。

「¹²……然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大いなるは愛なり」（コリント前13・12〜13）
と。信仰というのはどこにありましたかね。

「⁷凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり」
ここですね。この「おおよそ事信じ」という、こういったところから「信」というのが出てきたんでしょうか。それから「望」。これは今、出てきました。「おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり」と。それはすべては、愛から発していることなんです。「愛は寛容にして」以下のところに「愛」の姿がありました。愛は、一言でいえば、

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし」（ヨハネ15・13）

「キリストは私たちのために生命を棄てたまえり。これによりて我らは愛ということを知りたり」

と。まことに棄身の愛であり、人のために生命を献げていくようなそういう姿、これが実に愛であった。それをもっとも100%に現されたのが、イエス・キリストご自身でありました。私はこのたびの特別集会では、あえて「信仰」ということを表に出しませんでした。でも、私たちがキリストと一つにされている事態が「信」という事態なんです。イエスさまが私たちを信じきつてくださったっている。私たちはその信に応えて、イエスさまにすがっていく。十字架ですべてが片づけられている。このことを100%、ありがたいことだと思つて受けていく。こういうすべての姿を「信」といいます。「何かを信じる」とか、そういうレベルでは



ない。一切を受けられる。神さまが我々に関してもつておられる御思い、御業、キリストの愛、十字架に極まりし神の愛、キリストの棄身の御業、罪の許し、贖い、それら一切をことごとく水を割らないで、私をあなたの中に入れて、「はいっ」と言っていたら、取捨選択しない。そっくりいただく。それを「信」と言います。この信があつて、私たちはキリストさまと結ばれています。そして、キリストさまにあつて、望みをいただき、自由をいただいています。

御霊の本質は愛なんです。キリストが弟子たちに最後の晩餐の所で語られたあのお言葉、

「たった一つの戒めをあなたの方に遺していく。それは何か。私がある方を愛したように、あなた方も互いに相愛しなさい」

と。そして、

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし」（ヨハネ15・

13）

と。この言葉ですね。15章のちょうどまん中あたりにこの言葉が出てきます。自分の生命は一回きりしか棄てられませんから、そんなに簡単に、この友人にもあの友人にも生命を棄てようとしたって、生命は数限りなくあるわけではありません。生命は一つしかありません。だから、ここで言われているその気概をもつて、その心をもつて、あなた方はことに当たりなさい。己を惜しまずして、自分を差し出していきなさいということです。己の利を求めめるのではなくて、己を与えていく。私は一番初めに、

「自分を十字架に付けてしか、この特別集會に臨めない。己が立っていたら、集會はできない。己は十字架で死んで、私はもう何ものでもありません。『主さま、あなたが100%働いてください』と言って、我がうちに死は働き、兄弟姉妹のうちに生命が流れ、生命があふれる。その姿に徹したい」というようなことを申しました。それと同じことだと思っんです。

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし」

と。「死ぬつもりでやれば、どんなことだってできる」とよく言いますね。自殺しようとする人に向かって、

「あんた、死のうと思つたんだろ。死んだ気になって、いっぺんやつてごらん。思いきりあばれてごらん。それからでも遅くはないだろ」

と。そういう気持ちで子どものために祈る。友のために祈る。誰かのために祈る。どうにもならない問題がある。そういうときに、本当に自分は死んだ気になって一生懸命に祈る。一生懸命に尽くす。己に何か残すところがありますと、力が出てこないんです。全部、さげ出して、死んだつもりで尽くしていけば、そこに道が開ける。そういうことをこの御言は、

「人その友のために己の生命を棄つる」



というのは、そういう意味で、己をいわば犠牲にしていく、いけにえにしていく、献げていく。そのときに、キリストが働いて、キリストが人にできないことをなさってください。だから、何ごとにも全的ということが大事なんです。質的ですよ、量的ではありません。できることは限られています。けれども、ある友の救いのためであれば、そのために自分を全部そこぶつけていく。自分の時間を全部ぶつけていく。そういう気持ちで、祈りで語っていけば、そこに主は働いてくださる。「ああ、その時間は損したな」なんて絶対に思わない。

●伝道者が私の天職

私は昨晩も、祈禱会を終わって、皆さんとお話して、少し早めに部屋に帰りましたけれども、そのあとつくづく思った。私は一応、学問を志して学者としてやってきた。それは同時に教育の道にたずさわってきた。それから、裁判所にも勤めた。けれども、結局は私に一番向いているのは、伝道者かなと。キリストに仕えて、キリストの御言を直接に伝えていく、これがやっぱり私の天職ではないかなと、昨日初めて思いました。本当にそう思いました。ですから、皆さんもそういうつもりで、私に接してくださいますようお願いしたいと思います。

それから、今度は、ピリピ書2章にいきましょう。少し御言だけを読み上げて、終わりとしたいと思います。

「1この故に若しキリストによる^{すすめ}勧、愛による^{なぐさめ}慰安、御霊の交際^{まじわり}、また^{あわれみ}憐憫と慈悲とあらば、²なんじら念^{おもひ}を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思うことを一つにして、我が喜^{よろこび}悦^みを充たしめよ。³何事にまれ、徒党また虚栄のため^すに為な、おのおの謙遜をもて互に人を己^{まさ}に勝れりと為よ。⁴おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ、⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶即ち彼は神の貌^{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、⁷反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状^{さま}にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。⁹この故に神は彼を高く上げて、之に諸般^{もろもろ}の名にまさる名を賜いたり。¹⁰これ天に在るもの、地にあるもの、地の下にあるもの、悉^{ことごと}くイエスの名によりて膝を屈^{かが}め、¹¹且^{かつ}もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり」(ピリピ2:1~11)

それから、ガラテヤ書5章、

「1キリストは自由を得させん為に我らを釈^とき放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷^{くびき}の軛^{つな}に繋がるな。²視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。³又さらに凡て割礼を受くる人に証す、かれは律



法の全体を行うべき負債あり。4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたり、恩恵より墮ちたり。5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。……13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反つて愛をもて互に事えよ。14 それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣を愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。15 心せよ、若し互に咬み食わば相共に亡されん」（ガラテヤ5・1〜15）

すべて、担いの愛ということです。

それから、ローマ書13章8節から、

「8 汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。9 それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云えるこの他なお誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』という言葉の中にみな籠るなり。10 愛は隣を害わず、この故に愛は律法の完全なり」（ローマ13・8〜10）

●愛には懼れなし

最後にヨハネの第一の手紙の4章7節から、

「7 愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。8 愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。9 神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10 愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めの供物となし給いし是なり。11 愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。12 未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。13 神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。14 又われら父のその子を遣して世の救主となし給いしを見て、その証をなすなり。15 凡そイエスを神の子と言ひあらわす者は神かれに居り、かれ神に居る。16 我らに対する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給う。17 斯く我らの愛、完全をえて審判の日に懼なからしむ。我等この世にありて主の如くなるに因る。18 愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。19 我らの愛するは、



神まず我らを愛し給うによる。20人もし『われ神を愛す』と書いて、その兄弟を憎まば、これ偽^{いつわりもの}者なり。既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、未だ見ぬ神を愛すること能わず。21神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし。我等この誠命を神より受けたリ」（ヨハネ一4:7-21）

この中に、「愛は懼なし」とあるでしょ。これは私はまだキリストに導かれて始めの段階のときにこの言葉が非常に、ある意味では、引つ掛かっていました。私には懼れがあつたんですね。その時に「兄弟が、「全き愛は懼を除く」という言葉を贈ってくれたんです。

「愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あればなり。懼るる者は、愛
いまだ全からず」

と。我々の側でびくびくして、神さまの方の愛を制限しているんですね。だから、それを本当に全的に投げかけていって、

「神は愛だ。100%の愛だ」

と。その愛を貰ったら、もう懼れはなくなるんです。もう審判もなくなる。この十字架で全部引き受けてくださったんですから。神さまの前に出て、懼れというのはなくなるんです。けれども、絶対に傲慢にはなりません。どこまでも、感謝、平伏しです。愛が全く貫徹されるところには懼れはなく、平安があるのみなんです。祝福が伴います。だから、

「全き愛は懼を除く」

という。もし、皆さまの中でまだ、

「神さまは罰するのではないか。神さまは私を赦さないのではないか」

とか何かそういう懼れの気持ちがどこか心にあつたり、特に自分がまずいことをやった時に、

「ああ、しまった。また審かれるのではないか」

という思いは、人間である以上は湧きますよね。良心的な人ほど湧きます。けれども、この十字架の愛というのは、そういう私たちの姿のいかんによって、絶対に左右されない完全な愛です。全き愛です。そして、完全に懼れの心を取り去ってください。そして、「主さま！」と呼ばしめてくださる。平安が心を支配します。実に平安です。

「聖霊」と言うと、皆さん、何か感じるものかと思われます。でも、私は長いあいだ、そうではなかった。平安がありました。

「あつ、この平安は聖霊からきている平安だ」

と。私は、いわゆる経験的に聖霊のバプテスマを受けて、全身が痺れたとか、異言がとびだしたとか、そんなことは何ひとつ経験はないけれども、この誰も奪うことができない平安、これはイエスキリストの中に自分を投げかけて祈り、そして、「いいんだよ」と、そういう赦しをいただいているときに、本当にえもいえない平安が自分を支配しているのを感じるんですね。

「あつ、この平安のあるところに御霊がいらつしやるんだ。御霊は平安の霊だ」



と。

「視よ、われ平安を汝に与う。この世の与える平安ではない。誰も取り去ることができない」

と。そういうことが、ヨハネ伝14章に、「助主を送る」というところに書かれています。だから、私にとって、御霊が内住して下さっているというメルクマール（目じるし）は、平安ということでした。だから、私も御霊の器なんだと自分で言い聞かせて、懼れずに告白していただけるんだ、集会で皆さまの前に立てるんだと、そういうふうにだんだん思うようになりました。それはほぼ1970年以降くらいでしょうか。導かれたのが、1956年ですから、14年くらいたっています。そういう道の前を経、いよいよキリストさまが慕わしい、近しい、そういうことがいよいよ迫ってくるものですから、皆さまの前にこの三日間、わがうちにあるキリストを告白させていただいたんです。私に恵みをくださったキリストは、皆さまにも等しき恵みを与えてくださる。絶対、それ以下ではない。本当にそうなんですよね。それをもう100%信じて、どうぞ、これからも勇ましく喜ばしく、助け合って進んでくださいますように。それでは、お祈りいたします。

